



(社)日本建築家協会 沖縄支部

松山 喜治 撰 国 建

天空にそびえるポタラ宮

「天空列車でチベットへ」このポスターを見て即、決めた。チベットの



ジョカン寺からポタラ宮を望む

ラサにあるポタラ宮を見てこよう！友人を誘って行くことにした。

ポタラ宮については以前からいつてみたい場所であり、私たちが建築家の仲間であれば一度は訪れたい場所のひとつであろう。訪れる一年前にラサまで鉄道が繋がったニュースも聞いており、近いうちには是非旅したいと思っていた。年に一度は旅をしよつと決め、ここ数年はアジアにこだわり各国の世界遺産を中心に10日間程度の旅をしている。会社勤めの中で日常業務に影響しない範囲で休暇をとる五感を刺激する時間を設けて自身を励ましていくところでした。さて、本題にはいろいろ。北京—西安—西寧と飛行機で移動し、西寧からラサまでの2,000

歴史、文化の厚みに圧倒される

0 kmを列車で移動する道程となる。

ラサまでは26時間かかるが途中、4,500 mの高地を越えるため高山病の予防薬を飲みながらの移動であった。車窓からみえる風景は壮観である。山脈と山脈の間を縫って走る列車からは白い雪を戴いた山々が見える。近くには高原の羊の群れを追う牧童の姿があったり、揚子江の源流が大地を這うように流れる様子が見えたり、雄大な風景に見とれてしまう。

チベット自治区の首都であるラサは日本の富士山と同等の標高3,800 mにあり気候は非常に乾燥した場所です。ご存知のように近年、中国人民解放軍がラサを占拠してダライ・ラマ 14世がインドに亡命する1959年までラサは政治の中心地であったと同時にチベット族の聖地である。そしてラサの象徴であるポタラ宮は300年にわたり歴代のダライ・ラマ



五体投地をしながら聖地に向かう親子

が住んだ宮殿である。その姿は圧倒的なスケールとポリウムである。

宮殿の上層部の右側は白宮と呼ばれ歴代のダライ・ラマの居室があり、外部から要人をむかえる謁見室があったり、政治をおこなう会議諸室が配置されている。左側は紅宮と呼ばれ、歴代のダライ・ラマを祀った靈場とか昔の高僧のミイラが安置されている。ポタラ宮にある部屋は1,000を越えるといわれているが全部を見ることはできず、限られた場所のみ観光客に開放している。

チベット仏教の聖地がラサにあるため市内を信者が五体投地をしながら聖地に向かう様子は噂どおりでした。

(※掲載写真は著者提供)